

The Professor と初期批評

杉村 藍

The Professor and the Early Reviews

Ai SUGIMURA

I はじめに

Charlotte Brontë (1816–55) は生涯に四つの小説を残した。発表順に、*Jane Eyre* (1847)、*Shirley* (1849)、*Villette* (1853) そして *The Professor* (1857) の四作である。このうち最後に出版された *The Professor* は、出版年からもわかるように作者の死後出版となった作品である。しかし執筆されたのは他の三作よりも早く、実際には Charlotte の小説第一作であった。

彼女が妹たちと初めて本格的な出版を試みた詩集 *Poems by Currer, Ellis, and Acton Bell* (1846) がほとんど何の反響も呼び起こさず失敗に終わったとき、彼女たちは次に小説の出版に挑戦することにした。こうして生まれたのが Emily Brontë (1818–48) の *Wuthering Heights* (1847)、Anne Brontë (1820–49) の *Agnes Grey* (1847)、そして *The Professor* であった。妹たちの小説が何とか出版社を見つけたのに対し、*The Professor* は次々と拒否され、ついに出版には漕ぎつけなかった。結局この小説は出版されることなく、Charlotte は次作 *Jane Eyre* でようやく作家デビューを果たすことになる。

その後も Charlotte は *The Professor* の出版を何度か試みるが、結局出版社の了解を得ることができず、この小説は彼女の生前ついに日の目を見ることはなかった。*The Professor* はなぜ受け入れられなかったのか。最初の小説ということで、単純に作者が書き慣れていなかったためなのか。あるいは、当時の読者がこの作品の意義を理解できなかったということなのか。小論では、*The Professor* が執筆されまた出版された当時、人々がこの小説をどのように読み、捉えていたのかを跡づけ、出版当初の書評を主に用いながら、*The Professor* が繰り返し拒否された理由を探ってみたい。

II *The Professor* 出版の経緯

The Professor は作者の生前、9回にもわたって出版を拒否された¹⁾。そのうち6回は小説家としてデビューする以前、妹たちとともに出版社を探しているときであった。この時のいきさつに関しては、Charlotte の伝記を執筆した Elizabeth Gaskell (1810–65) が *The Life of Charlotte Brontë* (1857) で述べている。

All this time, notwithstanding the domestic anxieties which were harassing them——

notwithstanding the ill-success of their poems—the three sisters were trying that other literary venture to which Charlotte made allusion in one of her letters to the Messrs. Aylott. Each of them had written a prose tale, hoping that the three might be published together....

The three tales had tried their fate in vain together; at length they were sent forth separately, and for many months with still-continued ill success.²⁾

ここで述べられている姉妹の三作品とは、先に触れた *Wuthering Heights*、*Agnes Grey* そして *The Professor* である。立て続けに6社から原稿を突き返され一人出版社を見つけることのできなかった Charlotte は、一旦 *The Professor* の出版を諦める。

しかし *Jane Eyre* によって作家としての地位を不動のものとした後も、Charlotte は最初の小説 *The Professor* を何とか出版したいという強い意向をもっていた。出版社が次作を打診してきたとき、彼女はこの小説のことを考えた。

My wish is to recast ‘The Professor,’ add as well as I can what is deficient, retrench some parts, develop others, and make of it a three-volume work——no easy task, I know, yet I trust not an impracticable one.³⁾

これは Charlotte の出版社であった Smith, Elder and Co. の出版顧問、W. S. Williams に宛てた彼女の手紙である。彼女は加筆、修正しながら、この作品を当時小説を出版する際の一般的な形式であった三巻本に足る長さにしようと申し出ている。しかし、出版界の需要をも考慮に入れた申し入れにもかかわらず、この小説はまたも出版を拒否される。

Charlotte は第三作 *Shirley* 出版後も再度この作品の出版を試みている。しかしながら、同じく Smith, Elder and Co. から三回目の拒絶を受けると、さすがに彼女もこの小説の出版を諦めざるを得なかった。

Perhaps it is hardly necessary to trouble you with an answer to your last, as I have already written to Mr Williams, and no doubt he will have told you that I have yielded with ignoble facility in the matter of ‘The Professor.’ Still, it may be proper to make some attempt towards dignifying that act of submission by averring that it was done ‘under protest.’⁴⁾

この後 Charlotte が出版した小説は *Villette* 一作で、他に *Villette* の後で取りかかった絶筆 *Emma* と *Willie Ellin* が残されているが、さらに *The Professor* の出版を試みた形跡はない。この小説はついに出版されることなく、1855年、Charlotte は永眠する。

作者の生前、9回にもわたる拒絶を受けたこの小説は、1856年7月、Mrs. Gaskell が Sir James Kay Shuttleworth を伴って Charlotte の残された夫 Arthur Bell Nicholls を訪れた際に、初期作品の手稿とともにこの *The Professor* の原稿を入手したことからついに出版されることになった。Mrs. Gaskell はこのときすでに *The Life of Charlotte Brontë* のかなりの部分を書き上げており、伝記の題材となったこの偉大な作家の未発表作品の出版は、伝記の出版と相俟ってどちらの売り上げにも有利に働き得る格好の材料であった。彼女が *The Professor* の出版を伝記の出版に便乗させる形で考えていたことは、友人への手紙のなかで “When would the Life [of Charlotte Brontë] be ready.... The time of publishing the Prof. would have to be guided by that.”⁵⁾ と述べていたことから

明らかであるし、実際、*The Professor* に先立って 3 月 25 日に出版された *The Life of Charlotte Brontë* の第 15 章にはこの伝記に続いて間もなく *The Professor* が出版されるであろうという予告がなされている。そして同年 6 月 6 日ついにこの小説は出版され、同月 22 日には早くも *The Life of Charlotte Brontë* の第 3 版が出されている。Charlotte があれほど出版を願った最初の小説は、こうして彼女の死後 2 年ほど経過して、ようやく刊行されたのである。

III Charlotte Brontë 自身の評価

9 回にもわたる拒絶にもかかわらず、Charlotte が *The Professor* の出版に並々ならぬ熱意を抱いていたことはすでに見たとおりである。これは、自分自身の最初の本格的な小説に対する思い入れのためでもあるが、それだけではなく、彼女はこの小説で作家として画期的な試みをしており、作品がもつ独自の価値を確信していたためでもある。彼女がどのような点にその価値を見出していたのか、彼女のこの作品に対する評価を知ることは、後に小説出版後の批評家たちがそれを理解し評価し得たかを検討する際に重要となる。そこで次に、Charlotte 自身が *The Professor* をどのような意図をもって執筆したのか、そしてそれをどのように評価していたのかを見てみたい。

Charlotte がこの小説で何を描き出そうとしていたのか、彼女の意図は“Preface”に明らかである。

I said to myself that my hero should work his way through life as I had seen real living men work theirs—that he should never get a shilling he had not earned—that no sudden turns should lift him in a moment to wealth and high station—that whatever small competency he might gain should be won by the sweat of his brow—that before he could find so much as an arbour to sit down in—he should master at least half the ascent of the hill of Difficulty—that he should not even marry a beautiful nor a rich wife, nor a lady of rank—As Adam’s Son he should share Adam’s doom—Labour throughout life and a mixed and moderate cup of enjoyment.⁶⁾

Charlotte は処女作のなかで現実の人間とその生活を描こうとしたのである。これはリアリズム小説に取り組もうとする彼女の意欲的な宣言にほかならなかった。

また、*Jane Eyre* に続く出版第二作としてこの小説を出版社に申し入れた際の手紙には、彼女がベスト・セラーとなった *Jane Eyre* に劣らぬ作品であると自負していた言葉を見出すことができる。

A few days since I looked over ‘The Professor.’ I found the beginning very feeble, the whole narrative deficient in incident and in general attractiveness. Yet the middle and latter portion of the work, all that relates to Brussels, the Belgian school, etc., is as good as I can write: it contains more pith, more substance, more reality, in my judgment, than much of ‘Jane Eyre.’ It gives, I think, a new view of a grade, an occupation, and a class of characters—all very commonplace, very insignificant in themselves, but not more so than the materials composing that portion of ‘Jane Eyre’ which seems to please most generally.⁷⁾

これは *Jane Eyre* 出版直後に書かれたものであるが、Charlotte が *The Professor* の方がよりリアリティに富み社会階級や職業に関して新しい見解を示しているとして、中身の濃い新しい要素を備えた作品として高く評価していたことがわかる。彼女のこの確信こそが、度重なる拒絶にもかかわらず生涯にわたって *The Professor* の出版を試みる原動力となっていたのかもしれない。

IV 初期批評

The Professor が出版された当時、この小説の書評として発表されたものは、現在記録に残っているだけで全部で6つある⁸⁾。ただし、このうち一点はすでに発表されたものを再録したものであるため、実質的には5つの書評が出たことになる。その他、直接 *The Professor* だけを扱ったものでなくても、例えば *The Life of Charlotte Brontë* の書評のなかでこの小説を取り上げているケースもある。これらに加え、当時の人々の反応を知る資料として、他ならぬ Mrs. Gaskell がこの小説に言及している手紙が数通残っており、ここからも何らかのヒントを得ることができると思われる。

出版当初から1980年代初期までの Charlotte ならびに Emily の作品に関する書評、研究書の一覧を編纂した R. W. Crump は、*The Professor* が出版された当時の書評を概観して次のように述べている。

Although vastly inferior to her other three novels, The Professor received attention and approval as a work by Charlotte Brontë.... The favorable comment inspired by this least noteworthy of Charlotte Brontë's literary productions is an accurate measure of the high esteem in which she was then held, a regard heightened by the publication of Elizabeth Gaskell's sympathetic biography of her in that same year.⁹⁾

Crump 自身はこの小説が Charlotte の他の3作に比べ明らかに劣るとしている。さらに注目すべきは、同年に出版された *The Life of Charlotte Brontë* の影響から、作者の死後出版となったこの小説が必要以上に高い評価を得ていたと述べている点である。Gaskell は伝記の執筆に当たって Charlotte の生涯の悲劇的側面を大いに強調していたから、こうした反応があり得たことは容易に想像できる。

しかしながら、当時の書評を読んでも、先の Crump の意見には疑問が生じてくる。そこで実際に当時の人々の *The Professor* に対する反応を振り返ってみたい。

(i) Elizabeth Gaskell の反応

The Professor の書評を振り返る前に、小説の出版に先立って書かれた Mrs. Gaskell の手紙のなかにこの小説に関する記述があるので、まずはそれを見てみよう。手紙は小説が出版される前に書かれたものであるため、当然当時の出版界の動向や大衆の感傷などにまったく左右されない、Gaskell 個人の忌憚のない意見として読むことができる。

I don't agree with Sir James [Kay Shuttleworth] that 'the publication of this book would add to her literary fame'—I think it inferior to all her published works—but I think it a very curious link in her literary history, as showing the *promise* of much that was afterwards realized.¹⁰⁾

Gaskell が *The Professor* に言及した手紙は全部で 4 通残っており、そのうち 1 通は小説を読む前のものである。読後に書いた残り 3 通はいずれも上記の引用とほぼ同じ内容となっており、彼女の *The Professor* に関するこの評価が確定的なものであったことを窺わせる。別な手紙では Frances や Mlle Reuter のような女性登場人物を作品の魅力として挙げてはいるが、作品そのものに関しては “I don’t think it [*The Professor*] will add to her [Charlotte’s] reputation, ——the interest will arise from its being the work of so remarkable a mind”¹¹⁾ と、やはりその評価は低く、作家個人への関心や後の作品との関連という観点からのみ意味をもつ作品と捉えていたようである。そしてこうした Gaskell の読み方こそは、実は *The Professor* 出版後の批評家たちの意見の予告ともいうべきものだったのである。

そこで次に、*The Professor* 出版後に発表された書評を、その発表された順に見てみよう。

(ii) *Athenaeum* no. 1546 (13 June) 1857

1857年6月6日に出版された *The Professor* に対して最初に反応を示したのは *Athenaeum* であった。

That the work [*The Professor*] before us will be read and discussed by all who have read the *Life of Charlotte Brontë* is certain enough, but the interest excited will be rather curious than deep, and the impression left on the reader one of pain and incompleteness. It is a mere study for *Jane Eyre* or *Shirley*,...¹²⁾

匿名の筆者はまず、*The Professor* への関心が *Life of Charlotte Brontë* の延長上のものであることを見抜いている。作品そのものは痛ましい不完全な印象を読者に与えるに過ぎず、独立した一作品としてよりも、続いて執筆された Charlotte の他作品の習作という位置づけをしている。

他との関連を離れ、*The Professor* のみを批評の対象としている部分でも、この小説への評価は低い。

...throughout the novel the quietness is unnatural, the level of fact too uniform, the restraint and the theory of life too plain. The principles and the art of the writer, though true, excite no corresponding sympathy on the part of the reader,——few demands being made on his softer or gentler nature.¹³⁾

Charlotte がこの小説で試みた、現実の生きた男たちと同じように働き、運命の変転によるドラマティックな変化を享受しない主人公を描くという方針は、作品そのものをあまりに平板で興味のないものとしてしまったと受け取られている。筆者は彼女の意図が真実であることを認めはするものの、読者の心に何の共感も呼ばないこの小説に特別な魅力を見出してはいない。そのため、*The Professor* はやはり Charlotte の生涯や彼女の他の作品との関連においてのみ意味をもつという、二次的な存在として意義を認められているに過ぎないのである。

(iii) *Economist* 15 (27 June)

この書評は全文が比較的短いなかにも示唆に富む指摘が多く、*The Professor* に関して厳しい意見を展開している。設定が類似していることから、*Villette* と比較して作品を読んでいる。そして両作品の主人公を取り上げ、“The “Professor” is, as we have said, “Lucy Snowe” in masculine attire”¹⁴⁾ と述べ、主人公 William Crimsworth が男装した女性に過ぎない、すなわち男性としては

十分に描かれておらず、Charlotte の他の作品のヒロインたちの巫種のような存在であるとしている。

There is in even a greater degree than in “Villette” and “Jane Eyre” a want in “The Professor” of that largeness of sympathy with human nature out of which the too sharp outline of Miss Brontë’s style, perhaps, inevitably springs.¹⁵⁾

さらに、Charlotte の他作品よりも人間の本质に対する共感が大きく欠けていると指摘している。これは、この作品の方が *Jane Eyre* 以上にリアリティと実質に富むとしていた Charlotte 自身の見解とまったく相反するものである。この批評を見る限り、彼女の意図はまったく理解されていなかった、もしくは理解されるべき表現が充分になされていなかったといわざるを得ない。

(iv) Examiner (London) (20 June) 1857

この書評の筆者は Charlotte が “Preface” で述べた意図をそのままに受け取った読み方をしている。

The world she [Charlotte] saw was, indeed, but a shadow of the truth, while her perception of the shadow was so vivid, that when she described it she could bring it home to us, by the mere substance of her words, as something more distinct than the reality itself as shadowed in the words of nine-tenths of her neighbours. Her thoughts were very real to her, and she had taught herself to put the force of her genius not into the ornaments, but into the essentials of speech, to give her whole mind to her meaning. She did this in *The Professor*, as she did it afterwards in *Jane Eyre* and in *Shirley*.¹⁶⁾

筆者は、作者が感じ取っていた真実を言葉によって表現した世界として、*The Professor* を *Jane Eyre* や *Shirley* と同列に置いている。

しかしながら、筆者は別の箇所では “Her last book [*Villette*] was the healthiest, and had she lived we do not doubt that out of her perfect happiness to which she had but just attained before she died, there would have come a book like this her first book...”¹⁷⁾ と述べ、Mrs. Gaskell の *The Life of Charlotte Brontë* の内容をそのまま受け売りしている。*Villette* は単純に健康的といえる作品ではなく、Charlotte が留学先のブリュッセルで心を病む寸前まで追い詰められた心理状態を描き、また弟妹を相次いで失い一人取り残された孤独感が色濃く反映された小説である。また、彼女が死の直前に完全な幸福を得たという言及は、Mrs. Gaskell が伝記のなかで作り出した Charlotte 像を鵜呑みにしたためのものである。こうした点を考えると、この筆者の書評は独自の意見を表したものであるというよりは、書かれたものをそのまま信じ込んでいるに過ぎないという印象が否めない。

(v) Dublin University Magazine 50 (July) 1857

7月には *Dublin University Magazine* が *The Professor* の書評を掲載した。この書評は *The Life of Charlotte Brontë* を非常に意識したもので、*The Professor* の書評でありながら、その半分近くを伝記の紹介に当てている。*The Professor* を扱った部分もあらずじがほとんどで、ところどころに寸評があるといった書評である。

It is sufficient to say in a general way that it exhibits many of the beauties and some of the defects

of this gifted writer ; taking its tone, as it does, principally from those experiences of a school-teacher's life, which seem more or less strongly to have formed her mind and tinged her writings from first to last.¹⁸⁾

The Professor が Charlotte の長所、短所をともに表わし、他の作品にも共通する教員生活の経験を描いていると総括し、あとは作品からの引用とともにあらすじが述べられている。筆者は作品そのものを深く掘り下げて読み込んではいないが、あらすじを辿りながらこの小説のなかで興味ぶかい、もしくは優れていると思われる点については次々と言及している。書評のなかで挙げられているのは、Mademoiselle Reuter の描写 (p. 96)、正しく努力した者は報われるという教訓 (p. 99)、心気症の描写の力強さ (p. 100) などである。筆者は “Into this quiet and unambitious tale some faults have crept which we do not mean to extenuate”¹⁹⁾ と述べ、この小説が読み物としての事件や展開に乏しい平板な作品であり、無視できない欠点があることも認めているが、それと同時に上述のような長所も具体的に挙げている。この *Dublin University Magazine* は、初期批評のなかでは *The Professor* の長所をもっとも多く認めまた紹介した書評といえる。

(vi) Harper's New Monthly Magazine 15 (August) 1857

現在残っている *The Professor* 書評のなかで、これは小説が出版された年に発表された最後の書評に当たる。書評の冒頭の部分で、この作品が Charlotte の他の小説のようなプロットもなければ情熱もない劣った作品であると断言した後、筆者はさらに次のように述べている。

The plot is singularly inartificial, has no mystery to act on the imagination of the reader, and is too transparent in its final issue to pique his curiosity. But the vivid and exact delineations of real life, and the natural conceptions of character which abound in the work, amply redeem this deficiency.²⁰⁾

プロットの稚拙さや読者の想像力への刺激が欠如している部分を、現実生活の正確な描写が埋め合わせをしているとみなしている。他の部分はともかく、この現実生活の正確な描写はまさに Charlotte が意図したものであり、批評家はそれを汲み取っているといえる。しかし、独立した作品としてのこの小説に対する評価はやはり低く、“As a preliminary study for the composition of “Jane Eyre” and “Villette,” it is full of interest”²¹⁾ と、Charlotte の他の作品が成立する予備段階を知る資料としての価値を認めているに過ぎない。

(vii) その他の批評

出版当時、*The Professor* の書評として発表されたものは上述の 5 つであるが、その他にも *The Life of Charlotte Brontë* の書評のなかでこの小説が言及されている場合がある。そうしたなかからも、いくつかこの作品についての意見を見てみよう。

The Professor, however, was everywhere rejected; and now that ... it has been thought proper to publish the tale, we are compelled to the conclusion that the award was substantially just. The Professor is a picture of school-life at Brussels; and although it is very remarkable as a literary curiosity, it is in itself the poorest of all Charlotte Brontë's productions....²²⁾

これは 1857 年 7 月に発表された *Blackwood's Magazine* の書評である。*The Professor* が度重なる拒絶を受けたのは当然であり、文学研究という点では興味があっても、Charlotte の作品のなか

ではもっとも劣ったものという判断が示されている。

また、翌58年に出た *North British Review* には次のようにある。

...no woman, we believe, has ever painted men as they are amongst men. Their imagination takes no grasp of a masculine character that is sufficiently strong to enable them to follow it in imagination into the society of men.... It is quite obvious to any reader who attends to the sketch of the character of the Professor, that the Professor is a woman in disguise,—as indeed she proves to be,—for she is quite properly stripped of her male costume, and turned into “Lucy Snowe” in *Villette*.²³⁾

女性に男性を描くことはできないという主張を前提に、*Economist* の批評家と同じく、*The Professor* の主人公 William Crimsworth が男装した Lucy Snowe に過ぎない、すなわち外見は男性として描かれていてもその内面は女性に他ならないとしている。これは、Charlotte Brontë が意図していた現実の人間（男性）を描くという第一目的を達成できていなかったということを表している。

以上のように、*The Professor* の初期批評は概してこの小説に対して厳しい意見を寄せている。あえてその利点を挙げるとすれば、Charlotte の後の作品との関連でこの小説に存在意義を見出すというくらいであろう。事実、書評のなかで何らかの形で Charlotte の他の作品に触れていないものは一つもない。Peter Bayne は後に、“*The Professor*, I make bold to say, has not received due appreciation. It is by no means a wonderful book, but it has signal merits.”²⁴⁾ と述べ、この小説の“signal merits”としての正当な評価を訴えた。彼の主張は今日 *The Professor* を研究する多くの研究者たちによって繰り返し引用されているものであるが、こうした彼の主張は、すでに *The Professor* の出版当時の批評家たちによって表明されていたものだったのである。しかしそれは同時に、*The Professor* が作家研究という点でのみ意味のある小説で、独立した芸術作品としては単純で稚拙であるという間接的な表現にほかならないのである²⁵⁾。

以上のように、これまで挙げてきた *The Professor* 出版当初の書評に共通した意見は、先に述べたように小説の出版前に Mrs. Gaskell が私信のなかで言及していた点とほぼ重なる。手紙の書かれた時期や、これが一般に公表されてはいない、あくまで個人的なものであったことを考え合わせれば、相互に影響関係がなかったことは明白である。また、こうしてまったく独立して表明された意見が偶然にも類似していたということは、これがこの時代、すなわち *The Professor* が出版された時代の人々の標準的な意見、感想であったと見ることはできるのではないであろうか。

R. W. Crump は、出版当初の *The Professor* の書評を、必要以上に好意的であったとしていた。そして Crump 自身指摘しているように、*The Life of Charlotte Brontë* のような読者の共感と同情を誘う伝記が出版された直後では、多くの批評家たちへの影響が当然懸念されたはずである。事実、小説の書評ではほとんどのものが *The Life of Charlotte Brontë* に何らかの言及をしている。しかしながら、実際にはほとんどすべての批評家がこの小説を Charlotte の作品のなかでもっとも劣った作品として、その欠点をはっきりと指摘し、せいぜい作家研究の題材として興味をそそる存在として二次的な意義を見出すに留まっている。Crump が指摘した“favorable”（好意的な）要素は、その批評内容にあるのではなく、むしろこれだけ魅力に乏しい小説を書評で取り

上げたという事実そのものであったかもしれない。確かにこの小説が *Jane Eyre* や *Villette* といった作品を生み出したその同じ作者によるものでなかったなら、このように注目を浴びることはなかったであろう。批評家たちによる特別の好意、それは彼らがこうして *The Professor* を批評したこと自体であったのかもしれない。

V *The Professor* の意義

The Professor は作者に対する大変同情的な雰囲気にもかかわらず、なぜ上述のようにもっとも劣った作品として評価されざるを得なかったのであろうか。*The Professor* が失敗作に終わった理由はいくつか挙げられるであろう。これが Charlotte が執筆した最初の小説であったことから、彼女がこうした大作を書き慣れていなかったことを主な原因に挙げることもできよう。しかし、Charlotte 自身 “Preface” で述べているように、彼女はこの小説を執筆する以前に、すでに大量の初期作品によって物を書くための修練を十分に積んでいた。さらに、*The Professor* 執筆後、Charlotte はほとんど間をおかずすぐに *Jane Eyre* の執筆に取りかかっている²⁶⁾。Charlotte が *The Professor* を完成させてから *Jane Eyre* を書き始めるまでの 3、4 ヶ月間が、大作を執筆することへの不慣れや、この二作が描き出した世界の明白な違いをすべて説明し得るとは思えない。

The Professor 失敗の原因については、Charlotte 自身も分析している。先に触れた “Preface” のなかで、彼女は次のように述べている。

...I found that Publishers, in general——scarcely approved this system, but would have liked something more imaginative and poetical——something more consonant with a highly wrought fancy, with a native taste for pathos——with sentiments more tender——elevated——unworldly——indeed until an author has tried to dispose of a M.S. of this kind he can never know what stores of romance and sensibility lie hidden in breasts he would not have suspected of casketing such treasures. Men in business are usually thought to prefer the real——on trial this idea will be often found fallacious: a passionate preference for the wild wonderful and thrilling——the strange, startling and harrowing agitates divers souls that shew a calm and sober surface.²⁷⁾

The Professor が、実際に出版社が求めるような詩的で想像力豊かな要素を備えていなかったこと、すなわち出版社や読者の好み、要求に一致しなかったことをこの小説が拒絶された理由として考えていたことがわかる。同様の分析は G. H. Lewes に宛てた 1847 年 11 月 6 日付の手紙にも見られ、この小説が読者が求める要素をもっておらず、そのため当時出版物の需要に大きな影響力をもっていた巡回文庫に適さないという商業的な理由を挙げている。

Novels of the Eighteen-Forties (1955) によって 1840 年代の小説とその作者たちにスポットを当てた Kathleen Tillotson は、次のように述べて *The Professor* が執筆されまた出版を拒否されたこの時代、人々が求めていたものが “silver fork novels” に代表されるような、いわゆる読み物としての面白さであったと指摘している。

Minor popular novels have much to tell us of the nature (and size) of the contemporary novel-reading public; they show what expectations had been built up in the minds of readers and hence how far the great novelists could afford to defeat those expectations.²⁸⁾

このように見ると、*The Professor* はまさに時代の読者が求めていた要素を欠いていたことになる。Charlotte 自身が自覚していた時代の要求との齟齬も、確かに *The Professor* の評価を下げる一因であったかもしれない。

しかしながら、わたしはそれ以上の問題がこの小説の価値を決定的に低いものとしていると思う。それは、Charlotte がこの小説を執筆する際に最大のテーマとした、現実に根ざした作品創造である。彼女のこの意図は“Preface”に明らかであり、またこれこそがこの小説がもつ、当時他にまったく例を見ない特徴でもあった。しかしながら、彼女がその意図を具体化するために採った方法は、不適切であったと言わざるを得ない。

The Professor は現実生活を忠実に写した小説といながらも、実際には非常に観念的な要素に富んだ作品である。苦難の末、主人公の努力が実を結ぶという結末は、「心正しき者は報われる」という因果応報の教えを描いた寓話を連想させる。また、リアリズムを標榜しつつ、小説にはロマン的要素が多すぎる。いわれなき兄の横暴、その根拠が明らかでない Hunsden のタイミングのよい援助、Frances との偶然の再会など、Charlotte 自身が避けなければならぬとしていた現実生活では起こりそうもないことが、この小説のなかでは次々と起こっているのである。

なかでも、特に現実の要素に乏しいと思われるのは、出版当初の批評家たちも揃って批判していた主人公 William Crimsworth である。彼こそもっとも現実離れた、観念に基づいて創造された人物と言えよう。彼はいかなる場面においてもあまりにも理性的に描かれている。兄からの屈辱、女学校の美しい生徒たちを前にしての授業、校長 Mlle Reuter との微妙な関係、これらのいずれにおいても、彼の態度、少なくとも彼自身が述べている行動は極めて理性的で模範的なものである。しかしながら、「現実の人間」であるならば、怒りや羞恥、嫉妬など大きな心理的動揺を経験して当然の場面で、なぜ彼のようにつねに正しき行動を取り判断を過つことがないのであろうか。彼の人物創造は、あたかも John Bunyan (1628-88) の *Pilgrim's Progress* (1678) のそれのようである。単純に一つの性格を体現する象徴的な人物と同じく、彼の性格は一面的で、すべてが理性によって簡単に割り切れてしまうかのようである²⁹⁾。Charlotte が描こうとした現実が、むしろ観念的であると述べたのは、主人公のこうした人物創造にも一因があるであろう。

また、Charlotte のリアリズムの限界は、「現実」が何を表わすのかという彼女自身の解釈の限界でもあったように思われる。しばしば指摘されるように、Charlotte は *The Professor* のなかでブリュッセルの街並みを非常に正確に再現しているという。ここにも、現実を小説のなかに描きたいという彼女の熱意の一端を見ることができる。しかし、あるものを実際通りに描くことがそのまま真実を描くことではないということは、他ならぬ Charlotte 自身が指摘していたことであった。G. H. Lewes に宛てた、有名な Jane Austen についての彼女の手紙を見てみよう。

Can there be a great artist without poetry?

What I call——what I will bend to, as a great artist, then——cannot be destitute of the divine gift. But by *poetry*, I am sure, you understand something different to what I do, as you do by ‘sentiment’....

Miss Austen being, as you say, without ‘sentiment,’ without *poetry*, maybe is sensible, real (more *real* than *true*), but she cannot be great.³⁰⁾

ここで Charlotte は“real”という語と“true”という語をその意味を対比させて用いている。

Austen が描くものは“real”であるかもしれないが詩情がない、そしてそれゆえに彼女は“true”ではあり得ず偉大さにおいて劣るとというのが彼女の主張である。

しかし、Charlotte が *The Professor* で採った方法こそは、彼女が軽蔑を込めて呼んだ“real”な側面を強調するものだったのではないであろうか。*The Professor* 出版当時の書評の一つ *Economist* は、Crimsworth を始めとする人物描写との関連からこの点を鋭く指摘している。

She [Charlotte] gives the special characteristic of men without giving sufficiently the common basis of all special characteristics, so that the predominant features of real life became isolated into absolute dominance or despotism in her sketches. Here again she is more of a photographer than an artist.³¹⁾

Charlotte は正確に描写していたかもしれないが、しかし彼女自身が先の手紙のなかで述べていたように、それだけでは芸術作品の成立条件とはなり得ないのである。*Economist* の批評家の“she is more of a photographer than an artist”という指摘は、彼女が Austen の *Pride and Prejudice* (1813) のなかに見出したという“An accurate daguerreotypied portrait of a commonplace face”³²⁾という彼女自身の言葉を思い起こさせる。

以上のように、Charlotte Brontë の第一作 *The Professor* は、彼女が描き出そうとした「現実」そのものの捉え方の限界から、頑ななリアリズムと観念的な思想、ロマンティズムが入り混じった「現実離れ」した作品になってしまった。そしてこの小説が抱えていた問題点を、出版当時の批評家たちの多くは適切に読み取り、また指摘していた。このように、*The Professor* はその時代の人々によつて的確に読まれまた評価されていたとすることができるであろう。

すでに述べたように、*The Professor* 自体は独立した芸術作品としては評価されなかったし、また当時のさまざまな批評が示すように、Charlotte の四作品のなかではもっとも劣った小説であったと認めざるを得ない。しかし *The Professor* には Charlotte の他の作品に依存しない、それ自体の価値はないのであろうか。

ある点においては、この小説は彼女の他の作品と同等に、いやあるいはそれら以上に小説家 Charlotte Brontë の特徴を表している作品とすることができるかもしれない。その特徴とは、彼女の斬新な改革家としての側面である。Charlotte は今日、ヴィクトリア朝社会の価値観に強く影響された作家として捉えられる傾向があるが、そのような一面をもつ一方で、当時の社会や慣習に対する非常に大胆な挑戦者としての側面ももっていた。よく知られている例としては、*Jane Eyre* において美貌や社会的地位に恵まれなくとも魅力的なヒロインを作り出したり、社会階層の差異が厳格であった当時、裕福な地主階級の男性に対して使用人にすぎない女性が人間としては両者が互いに平等であると主張するなど、この時代としては革命的な要素がふんだんにあった。Elizabeth Bowen がこの小説を“the first feminist novel”と呼んだのも、こうした前例のない新しさゆえである³³⁾。*Shirley* では当時注目されていた社会小説に取り組み、若干時代の流れに阿る形となったが、しかしここでも、Tillotson が指摘するように、単なる社会小説に留まらず、ヨークシャーというその土地に根ざした設定をしている³⁴⁾。また、年老いた独身女性のおかれた状況に関する考察は、当時の社会の影の部分に敢えて光を当てたもので、フェミニズムの視点から見ても非常に優れている。その他にも、最後の小説 *Villette* においては、当時小説の結末はハッピー・エンドという暗黙の了解があったにもかかわらず敢えて悲劇を予感させる結末を用意するなど、Charlotte は次々と文学界の慣習に挑戦していった。

そして、こうした彼女の斬新さを表わす最たる例は、*The Professor* で彼女が試みた現実の人間生活を小説に表現するという挑戦だったのではないであろうか。この試みそのものは、すでに見たようにさまざまな限界から優れた芸術作品を生み出すという結果には至らなかった。しかしそこには、小説家 Charlotte Brontë がもつ豊かな進取の気性が彼女の他の作品と同じように、あるいはそれらの作品以上に示されているといえるのではないであろうか。

註

Text: Edited by Margaret Smith and Herbert Rosengarten. Charlotte Brontë, *The Professor*. (Oxford: Clarendon Press) 1989.

- 1) Charlotte Brontë's letter to George Smith, dated February 5th, 1851.
- 2) Elizabeth Gaskell, *The Life of Charlotte Brontë*. (London: John Murray, 1920) The Haworth Edition. pp. 312-3.
- 3) Charlotte Brontë's letter to W. S. Williams, dated December 14th, 1847.
- 4) Charlotte Brontë's letter to George Smith, dated February 5th, 1851.
- 5) Elizabeth Gaskell's letter to Emily Shaen, dated September 8th, 1856.
- 6) Charlotte Brontë, "Preface" for *The Professor*. pp. 3-4.
- 7) Charlotte Brontë's letter to W. S. Williams, dated December 14th, 1847.
- 8) R.W.Crump ed., *Charlotte and Emily Brontë 1846-1915: a reference guide*. (Boston: G.K. Hall & Co., 1982).
- 9) Crump, "Introduction" p. xiii.
- 10) Elizabeth Gaskell's letter to George Smith, dated August 13th, 1856.
- 11) Elizabeth Gaskell's letter to Emily Shaen, dated September 7-8th, 1856.
- 12) Anon. Review of *The Professor*. *Athenaeum*. No. 1546 (13 June) 1857. p. 755.
- 13) *Ibid.*, p. 757.
- 14) Anon. Review of *The Professor*. *Economist*. 15 (27 June) 1857.
- 15) *Ibid.*, p. 702.
- 16) Anon. Review of *The Professor*. *Examiner* (20 June) 1857, p. 388.
- 17) *Ibid.*, p. 388.
- 18) Anon. "Curren Bell's "Professor."" *Dublin University Magazine* 50 (July) 1857, p. 94.
- 19) *Ibid.*, p. 100.
- 20) Anon. Review of *The Professor*. *Harper's New Monthly Magazine* 15 (August) 1857, p. 404.
- 21) *Ibid.*, p. 404.
- 22) [E. S. Dallas] Review of *The Professor*. *Blackwood's Magazine* 82 (July) 1857. Repr. Miriam Allott ed., *The Brontës: The Critical Heritage*. (London and Boston: Routledge & Kegan Paul, 1974) p. 361.
- 23) Anon. "Novels by the Authoress of 'John Halifax.'" *North British Review* 29, 1858, p. 474.
- 24) Peter Bayne, *Two Great Englishwomen: Mrs Browning and Charlotte Brontë*. (1881) Repr. Miriam Allott ed., *The Brontës: The Critical Heritage*. p. 428.
- 25) その他、いくつかの書評が共通して評価しているものとしては、ヒロイン Frances Henri の人物創造が挙げられる (*Economist*, *National Review* (June 1857) など)。こうした批評は、Charlotte が後の三作品で男性を主人公にせず、いずれも Jane Eyre や Caroline Helston, Shirley Keeldar, Lucy Snowe といった女性を主人公にして描いたことで成功していることを如実に裏書している。
- 26) Charlotte が *The Professor* の清書を終えたのは1846年5月27日。Gaskell の *The Life of Charlotte Brontë* によると、Charlotte は父の白内障の手術に付き添ってマンチェスターに行き、1846年9月28日にハワースに戻ったとき、*Jane Eyre* は書き始められたばかりだったという。(*The Life of Charlotte Brontë*. Chap. 15) しかし、中岡洋氏は Gaskell のこの記述には疑問があるとし、実際の執筆開始をマンチェスター滞在時ではなく、ハワース帰着後ではないかとしている (中岡洋編・著、『『ジェイン・エア』を読む』開文社出版、1995年、p. 17)。このように執筆の開始時期に関しては異説もあるが、1847年8月24日には Smith, Elder and Co. に *Jane Eyre* の原稿を送付していることから、*The Professor* 執筆後、ほとんど間をおかずに *Jane Eyre* が書かれたことは間違いない。
- 27) "Preface" for *The Professor*. p. 4.

- 28) Kathleen Tillotson, *Novels of the Eighteen-Forties*. (Oxford: Clarendon Press, 1971), p. 4.
- 29) 理性で割り切った発言をしながらも、Crimsworth は実際には動揺していたことを後になって別の場面で洩らしている部分がある。Mlle Reuter との関係を描いた部分にこうした例を見ることができるが、彼がこうして垣間見せる真情には、現実らしさよりもむしろ語り手としての不実を感じさせ、ますます彼の物語への不信感を募らせることになる。
- 30) Charlotte Brontë's letter to G. H. Lewes, dated January 18th, 1848.
- 31) Anon. *The Economist* 15, 1857, p. 702.
- 32) Charlotte Brontë's letter to G. H. Lewes, dated January 12th, 1848.
- 33) Elizabeth Bowen, *English Novelists*. (William Collins of London, 1942), p. 35.
- 34) Tillotson, pp. 90–91.

本稿は2002年10月5日に行なわれた日本ブロンテ協会大会におけるシンポジウム「*The Professor* とその時代」で発表したものに加筆・修正したものである。